

氏 名	ち だ しゅんた ろう 千 田 俊 太 郎
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 359 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	A Grammar of the Dom Language (ドム語文法)

論文調査委員	(主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘	教 授 田 窪 行 則	教 授 吉 田 和 彦
--------	------------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

ドム語はパプア・ニューギニアの高地、シンプー州に住むドムによって話される言語である。本論文はドム語の文法全体を記述するものである。全9章からなり、以下、各章ごとの要旨を述べる。

第1章 導入

ドム語が話されている地域はパプア・ニューギニアの高地、シンプー州のドム地域である。ドム地域は行政区域としてはグミネ区とシネシネ区にまたがる一部地域である。話者は一万人以上いると考えられる。

ドム語話者は全て多言語話者であり、ほとんどの話者がトク・ピシンを流暢に話すことができる。

トク・ピシンからの影響は借用語に典型的にみられる。新しい事物や概念に対して借用語を使うほか、ドム語で表現できる概念に対しても借用語が用いられることがある。

ドムはノン・ク、クルピ、クム・ク、コマ・ク、イライ・ク、ゴル・ク、コパン（以上すべてグミネ地区）、キワ・ク（シネシネ地区）といったいくつかの氏族からなる緩やかな連合体であり、言語の同一性からドムと称されるものの共同した活動は行わないため一つの部族・民族であるとは云えないかもしれない。ドムの部族としてのまとまりの緩やかさについては Brown (1995:14) にも指摘されている。

話者たちは氏族ごとに小さな方言差があると認識している。氏族は連続した土地に住み、同氏族の者同士で行動を共にすることが多いことからみても、筆者の断片的なデータからみても、方言差があるとすれば氏族単位のものであることは妥当な認識と確かめられることになる。本論文で使ったデータはノン・クのドムである。

ドム語は系統的にはシンプー語の一方言であり、もっとも近いシンプー語方言にはエラ語がある。エラはドムかどうかの境目にいる集団で、自分たちのことばをドムと称する者も中にはいる。言語的にもドム語の一方言としてよい。その他、キヤ語、ナウレ語、バリ語などとは相当の相互理解が可能である。これらの言語に関して筆者によるドム語以外には公にされている言語記述はない。

ドム語の名前自体は Capell の1947年の調査以来知られてきたが、その記述はこれまでにはなかった。

ドム語と、その周りの諸言語からなる方言連合体はシンプー語族と称される語族の東のグループをなす。シンプー語族に属する残りの諸言語も別の方言連合体をなすことが知られており、シンプー語族は二つのグループに大きく分けられると考えられる。

東のグループに属する言語のうち文法が出版されているのはクマン語、ゴリン語、シネシネ語タバレ方言、ソルト・ユイ語である。クマン語には辞書もある。

第2章 音韻論

ドム語の母音音素は /i, e, a, u, o, a:/。音素列 /ae/ は音声的には単母音である。また音節初頭に許されない子音連続を回避するため中舌高母音が挿入され、一子音からなる語は単独で発音するときは /i/ が後ろに添加される。一音節語以外で語

末の /e/ が任意に削除されうる。

子音音素は /p, b, m, t, d, n, k, g, s, r, l, y, w/。子音音素のうち /l, n, m, r/ は音節主音でありうる。

トク・ピシンの借用語に [f], [v], [ts], [dz] などが現われることがあるが, /j/ [dz] の音素としての地位が若い世代において比較的確立していることを除き不安定であり, /p/, /w/, /s/ といった音素の異音である。

/u/ の前 (またときに /o/ の前) で口蓋化する。有声閉鎖音 (で記したもの) には前鼻音化があり特に絶対語頭以外の位置では著しい。

/s, t, l/ は現在は異なる音素と認めざるをえないが, 近い過去に相補分布をなす一つの音素の音声実現であった可能性がある。

語を領域とするトーンが弁別的であり, 高型, 下降型, 上昇型の三つが区別される。接語が本来のトーンを失って先行する語の最終的なピッチより低く始まり若干下降するような接語型のトーンを取る。研究者によってトーンとアクセントの違いに対して異なる見解がもたれてきた。古典的にはメロディーの領域が語であるばあいにはアクセントと呼ぶもの, 直感的にはピッチ曲線が複雑なもののみをトーンと呼ぶものがあるが, みななんらかの語彙的なピッチの対立を指す。ドム語のトーンは語を領域とするが, アクセントの典型的な特徴である位置の対立ではなくメロディーの種類の対立をなしている点も見逃せない。メロディーの種類の対立をなすものをトーン, ピッチと関わる語の中の位置マークの対立をなすものをアクセントと呼ぶ立場からは, ドム語のピッチ対立はトーンである。また, 語を領域とすることから, 最近その特徴がしばしば取り上げられるようになった「語声調」というタイプに属するといえる。

第3章 語類

主要な語類には名詞, 形容詞, 動詞があり, その他代名詞, 後置詞, 間投詞等がたてられる。

まず動詞がその活用により他の品詞と区別される。形容詞は名詞と異なり主要部に後続する。名詞は他の名詞を修飾する際は主要部に先行する。

動詞語根の数が非常に少ないことが, ほかのパプア諸語と同様ドム語の一つの特徴となっている。

語類の中でも際立った特徴をもつものは場所名詞, 動名詞, 指示詞と思われ, さまざまな語類との関りで問題になるのが強調語である。

ある種の述語は項として場所名詞句を要求することがある。場所名詞は特別な標識なしに場所名詞句の主要部になるが, そうでないものは接語=la の後続を要する。

動名詞は屈折を担えない動詞と考えられ, 文中での使用には, なんらかの軽動詞による支えを必要とする。

指示詞は空間分割を上下にも行う点が特徴的であるほか動詞に付くことができるなどさまざまな用法をもち, ドム語文法の理解に重要である。

第4章 形態論

ドム語は主要部標示的な言語であり, 動詞には主語の人称・数, 名詞には所有者の人称・数が標示されるが, 主語や目的語に対する格標識はない。ドム語の形態的プロセスとして重要なのは接尾辞のみであり, また統合度はそれほど高くなく, 語根につく接尾辞はただか三つまでである。このことから, ドム語において形態論にまかされた仕事はそれほど大きくないとも言えるが, 接尾辞附加に附随しておくる母音の交替, 法の接尾辞の手前における分節音の変化や接辞の共起関係の記述が必要とされる。この章では接尾辞と附随現象に関する記述から始まる。

つぎに, ドム語における複合語の認め方について議論を進め, 複合語と呼ぶにたるものがほとんどない代わり複数の語からなる語彙項目 (句動詞やいわゆる慣用句的なもの) が非常に多いことを示す。

この議論とも関り, ドム語の重複形は形態的なプロセスでありながら語形成には関わらないことが最後に論じられる。

第5章 統語論

ドム語の構成素順は主要部が後ろに来る型である。例えば動詞は節の最終要素, 自動詞文は常に SV, 他動詞文は AOV が好まれ, 節連鎖においても主節が最終要素となる。所有者名詞句や属性を表わす名詞句などが名詞類を修飾するときも, 修飾要素が主要部に先行する。しかし形容詞類はこの原則に反し, 主要部に後続する。

名詞句の構造においては名詞を対にする操作が特徴的である。

人称・数は統語プロセスによる一致ではなく談話基盤で決まると考えられる。

動詞句の構造は、別章で取り上げる動詞連続のほか、動名詞が軽動詞を伴う、パプア諸語のジャーゴンでしばしば adjunct として言及されてきた特有の構造がある。

その他、この章では疑問、命令など文タイプについても論じる。

第6章 動詞連続

動詞連続によって表わされる意味・機能は多岐にわたる。

準備的移動を表わす句が動詞連続の先行要素として表現されるばあいには後続する動詞の前に名詞項などの介入要素が比較的自由に認められる。しかし、その他の動詞連続では動詞間にはさみうる要素は許されないか、大きな制約を受ける。

アスペクトを表わす要素が動詞連続の後続要素としてつけられるばあいの意味は、アスペクト標識の本動詞としての用法が色濃く残っており、特に存在動詞の意味理解がかかせない。

行動状態－結果状態の関係を作る動詞連続には自動詞的なものと他動詞的なものがある。結果状態を表わす動詞が自他両用であるばあいは構文が全体の他動性に大きく関わる。

結合価の増加も動詞連続によって表現される。

その他、慣用的な組み合わせが、所有を表わす動詞連続を中心に多くある。このような構成によりドム語の動詞語根の欠乏が補われていると考えられる。

第7章 節連鎖

ドム語は一つの文に複数の節が含まれる、複文、重文に相当する表現を多用する。この節の複合は、文の最終要素となる節が主節であり、それまでの節が全てそれに従属する節連鎖である。文の最終節となりうる述語を作る動詞の形式と中間節における動詞の形式とは異なる形式が用いられる。また中間動詞は当該の節の主語と後続節の主語との同一性により異なる形式が使われ、謂わゆるスイッチレファレンスを示す。このような文法特徴はパプア諸語にはよくみられることで知られている。

従属節が後続節の時制、極性の支配下にあるばあいとそうでないばあいがある。

形式的には必ず従属節－主節の関係が出てしまうドム語において、形式的には等位接続がないとも言える。しかし、戦略としての等位接続はドム語にも認められる。

従属法は節の名詞化にも関わる。従属法節が全体として名詞句としてはたらいっている証拠は形式的にも把握することが可能である。

さらに、この節の名詞化は、関係節のための特別な形式をもたないドム語に関係節の戦略をも与えている。意味的な関係からは関係節的なものが二種類認められる。従属法節が主要部名詞句を修飾するもの、また従属法節が主要部名詞句を内在するものである。しかしこれらがドム語における関係節であるとは言えない。名詞化された従属法節は同一の指示対象を節内にもっていないばあいでも別の名詞句を修飾することがあるからである。

第8章 引用

ドム語の引用においては直接話法と間接話法の二項対立による説明が成立しない。この章ではドム語の引用構文の特徴について記述する。

いわゆる話法の違いが反映されうる要素は複数存在する。ドム語においては時制は話法の違いに関係しない。

引用標識の有無も話法の違いではなく、別の条件によって決まるものである。

法の違いは直接引用と間接引用の対立に相当するものが存在するが、これは人称・数の示す振る舞いと一対一の対応をしない。

引用節内における人称・数のありかたは非常に興味深い。人称・数が完全に直接対間接の対立を示すのは主節の発話状況における聞き手を指示対象とする形式だけである。そうでないばあい、動詞につく人称・数の標識は必ず直接的でなければならない。

ところが、動詞につく人称・数と一致をしていると思われる名詞句は間接的でありうるのである。

そこで直接間接の二分法はドム語の引用においては成立しないが、話法に関わるそれぞれの要素が示す振る舞いパターンに

は制約がある。引用節内での振る舞いの可能性をまとめると間接化を受けやすい要素、受けうる要素、全く受けない要素の序列が見える。

第9章 指示詞

指示詞の用法は、統語・意味的にいくつかに分けられる。名詞句における用法と動詞句における用法、直示的な用法と非直示的な用法などである。

ドム語の指示詞は他の品詞にない独自の分布を示し、一つの品詞をなす。

直示用法における空間分割は話者からの遠近のほか上下を区別することや、それに可視性が加味されることが特徴となっている。

動詞につく用法は、形式的には従属法プラス指示詞であるが、意味的にはそれ以上のはたらきをもつ。例えば注意喚起のはたらきや発見の驚きを表わす用法は指示詞が名詞につく際にはもたないものである。

指示詞の非指示詞的はたらきには、非直示的に相対的な空間の位置を表わすばあいや、そこからの派生意味などが含まれる。

ドム語の指示詞は、全体としてははたらきの内容が不均質な体系をなしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、パプア・ニューギニアの高地、シンブー州で話されているドム語のレファレンス・グラマーとして書かれたものである。本論文（英文 A4 判286頁）は9章より構成されており、第1章が導入部、第2章から第5章までが文法の根幹部分の記述、第6章から第9章までがドム語に特徴的な現象の記述である。付録としてドム語のテキストや本論を補う資料が提出されている。

第1章で論者はドム語の使用状況、社会背景、地理的分布、周辺諸言語との関係とそれらの先行研究などを概観し、ドム語の類型的特点のあらましを紹介している。

第2章では、音韻論を扱っており、音素分析、音素配列、音節構造、さらにトーンについて論じた。特に語を領域とするトーンはドム語の一つの大きな特徴であり、この点は詳細な記述と分析をおこなっている。

第3章では、語類について論じている。語を主要な文法的振る舞いから分類することで、動詞が極端に少ないかわりに名詞類に属する語が非常に多いこと、さらに語彙の強調語の存在などについてその特徴を明らかにした。この言語に動詞語根の数が少ないことと、本論文の後半で扱われるいくつかの現象とは相関関係のあることに言及している。例えば慣用的な意味を担った動詞連続や“adjunct”と論者の呼ぶ統語的なスロットの存在は動詞の欠乏を補うためという。

第4章では形態論を扱っている。語根の接辞選択、形態音韻論的变化、重複の形式について述べた。またドム語では複合語と呼べる形式が極端に少ないことについても論じている。

第5章は統語論について論じた。ドム語に特徴的な現象として、他動性に関わる動詞の振る舞い、目的語代名詞の振る舞い、いわゆる“adjunct”、否定の不変化詞について網羅的に記述している。

第6章では動詞連続を扱っている。ドム語における動詞連続とは、動詞語根を並べることによって構成される複合述語を指す。論者は動詞連続のタイプを文法的、慣用的、その他に分けて詳しく記述している。ドム語は形態的な派生や複合プロセスに乏しい代わり、多くの文法機能が句レベルで実現されると論者は指摘する。たとえば、アスペクト、エヴィデンシャリティ、結合価の増加に関わる表現が動詞連続によってなされるという。また、動詞連続には慣用的な意味をもつ組み合わせもあり、それらについてはとりわけ詳細に論じている。

第7章では名詞化された節と、節の連鎖について記述している。なかでも名詞化された節が関係節の形成のためにも使われること、節の連鎖によって一文が極めて長くなりうることを中心に論じている。

第8章では引用の構文を扱っている。他の多くの言語にもいえることであるが、ドム語の引用構文においては直接話法と間接話法の二項対立による分析が成り立たない。いわゆる話法の違いが反映されうる要素が複数存在するため、論者は話法に関わりうる要素の個別の振る舞いを観察し、その共起のパターンとしての話法を記述している。引用節内における人称・数の在り方は特に複雑な様相を呈している。人称・数が完全に直接対間接の対立を示すのは主節の発話状況における聞き手を

指示対象とする形式だけであり、そうでない場合は、動詞につく人称・数の標識は必ず「直接」的でなければならない。また人称以外の直示形式がかならず「直接」的であるのに対し、法を表わす形式はほとんど常に「間接」的であるという。一見混沌とした引用構文のデータを、論者は、話法に関わる要素が示す振る舞いパターンを検証してゆくことによってと解きほぐし、間接化を受けやすい要素、受けうる要素、全く受けない要素の序列によって簡潔に記述されることを明示した。

第9章では指示詞を扱っている。ドム語には12の形式からなる指示詞の体系をもつ。まず、指示詞とそれに類する意味・機能をもつ形式の文法特徴を比較しながら品詞としての指示詞の概念を確定し、その上で指示詞の本来的な役割とも言える直示用法の記述を行っている。指示詞が距離によって使い分けられるのみならず、話し手からみた上下の配置によっても使い分けられるという。さらに非直示的な用法について記述している。話し手の背後の空間や不可視の領域をも指し示す指示詞の系列、直示でない空間概念としての上下、前後、遠近を表わす用法や、場所名詞との慣用的な結び付きを例を挙げて論じている。

ドム語は、若干の語彙資料を除いて言語研究者によって記述されたことのない言語である。同系とみなしうる周辺諸言語の中には文法記述や辞書などをもつものもあるが、継続的にシンブー州の言語を調査・研究している専門家は論者を除いて他にいない。論者は十数回の現地調査に基づいて上記内容を完成させた。その内容には第5章の統語論の記述や第7章の複文の記述などに多少の不足が認められるが、提出された網羅的なデータは貴重なものであり、その分析も緻密である。本論文がいわゆる「パプア諸語」研究に貢献するところは極めて大きく、今後この方面の研究に利用されることは確かである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。